「読書」

新著の余録

「林」

「生きること」の意味を追求

河村 陽子著

これは家族の物語である。

著者は93歳。1編目の「青い遍歴」は自由教育をめざした主人公「志村」が同僚の女性との恋愛事件解消も兼ね、シベリア鉄道で革命後のソ連に出かける話。

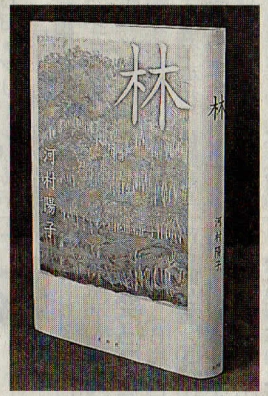
「志村」とは著者の父、志垣寛のことだ。車窓の風景と過去への追想が重なる。主人公は熊本師範を出て、教員に。妻も教員で母親が探してきた。文検に合格し、新教育のメッカ、奈良女高師附属小に栄転するが、飽きたらず、上京し、教育雑誌の編集者を経て、池袋児童の村小学校の主任となる。モスクワに着くと、活動写真に撮られ、映画館で一斉に上映された。

2編目の「接点」は戦時中、女学生だった私と父との話。教育評論家の偉い父と三里塚の国民学校に米をもらいに行く。校長室に通され、来意を告げると教師たちもやって来て、「差し上げる米がないのです」。意外な顔の父は「米はあなた、生徒が作ったものですよ」と逆に説法され、飼料用のトウモロコシの粉末「馬の歯」をもらい、村の宿に泊まる。部屋に布団を並べて寝て、父との間が近くなったと感じる。そんな父に「お父さん、日本は正義の戦、正義の戦っていっているけれど、正義って一体どういう事なの?」と聞くと、父は言下に「正義とはね、生きることさ」と答える。

「接点」の後段で、児童の村小学校での恋愛事件の相手と父の間に自分と同じ年の男の子ができていたと知らされる。父はぼけて見せ、明かしたのは母だった。表題となった「林」は、その母が六十の手習いで始めた日本画への執念を描いている。師は堅山南風。夫を亡くすが、その後も入選を重ねる。82歳の時を最後に落選が続くが、93歳まで挑戦をやめず、104歳で亡くなった。

著者も定年後、カルチャー教室に通い、小説の鍛錬を続け、この作品集は見事である。戦前から戦後にいたる家族の姿を通し、「生きること」の意味を追求し、しっかりとした文章である。ついでに書いておくと著者は俳優志垣太郎の母だ。

評・井上智重（元熊日記者）



水声社・2160円

◇かわむら・ようこ　1925年、東京生まれ、在住。60歳で小説を書き始めるが、母の介護に追われる。現在は100歳の夫を介護する。

太平洋戦争終結の2年後に生まれた。まだ日本全体が貧しかった子どもの頃。夢中で読んだミステリー本に登場する、欧米の豊かさに憧れた。

進駐軍が各地に入り、ついこの間まで「敵国」だった米軍男性らが駐留。日本人女性との間に多くの子どもが生まれた。母親と「混血児」への

届いた手紙から（一）

中略

先週から今朝に掛けて一気に読み終えることが出来ました。帯に書かれていた「９３歳が編んだ家族の物語」が示すとおりの、ご自身が体験なさったご自分の家族とそのメンバーたちの人生を描き出された力作だと先ず思いました。加賀乙彦にしろ宮本輝にしろ、自分の家族の歴史を素材に見事な小説を書きあげているわけで、河村さんのこの小説も私小説というよりもっと大きな時代、社会、人間を視る眼で書かれていることから、読了後に帯の真ん中に書かれている「人生は〈樹〉、家族は〈林〉」の意味もやっと分かりました。

中略

教育革新運動家でいらっしゃり、文筆家を志していらっしゃったお父様。６０の手習いで絵筆を執りなんと院展に何度も当選するという才能をお持ちのお母様。長兄や息子たち、長く主夫を務めた夫との夫婦の生活、それに伯母と従兄弟たちの物語が、そのどれもなかなかユニークな脇役たちとともに描き出されている様は、その日常生活や家族の繋がりの描写を背景に大変興味深く拝見しました。

中略

お父様をはじめ作中の登場人物への愛情が伝わってきますし、さまざまなエピソードの歴史的記録という以上に作者の思いが表に裏によく語られていて、人間としての作者ご自身の生きた記録になっていることに感銘を受けました。　中略

届いた手紙から（二）

中略

「接点」では、戦中戦後の日本人の苦しみが、大げさなドラマではなく、普段の生活を通して、それ故に切実に感じられました。お米をもらいに行くほうも、断るほうもそれを見ているほうもどんなにつらかっただろうと……。

中略

「林」は「老母との日々」と読み合わせて圧巻でした。過去の日本人が苦しんだ戦争、敗戦、貧困。これからの日本人が苦しむ、長生きと介護。両方を実感として持っていない今の学生たちに、生の雰囲気を知ってもらいたく、水声社に読書はがきで、「大学の生協に置くように働きかけて」と依頼しました。縁側で深々とお辞儀をしている母を振り切るようにあじさいの繁みを曲がるつらさはいかばかりのものか。それが分かる若者になってほしい。

「此岸」はなぜか「彼岸」の感覚で読み進んでいました。亡くなられた義理のお姉さんに哀悼をささげる文章として。そして気づきました。こちら岸の話なんだと。すさまじい葛藤を感じさせる描写が続いています。妻が死んで、家をたたむために、すべてを倉庫に保管するもの、息子に送るもの、そして、愛人の家に持っていくもの、もちろん捨てるものに分ける、鏡台の中のもの、位牌、震えあがってしまいます。哀悼をささげるべきは「此岸」に残された人々なのだ。　中略